



1981-7

No.154

【表紙】

聖ペテロの解放

ヘンドリック・テルブルッヘン

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

ニューヨークの写真美術環境……………菅 十一郎 4

国立歴史民俗博物館について……………中田 和夫 6

随想

奥浜名湖の印象……………林屋辰三郎 8

民事裁判に現れた家元制度(Ⅰ)……………大家 重夫 10

文化庁ニュース

第5回全国高等学校総合文化祭の開催……………13

昭和56年度(第36回)芸術祭の開催計画決まる……………13

第11回移動芸術祭秋季公演……………17
9月から全国各地にかけて

重要無形文化財の新指定等……………19

昭和56年度著作権講習会等の開催……………21

資料 日本における宗教団体の概況(Ⅰ)
……………文化庁文化部宗務課 22

我が県の文化行政
魅力ある地域文化の創造をめざして……………鶴橋 寛 25

国語シリーズ③ 「外来語」に関する問題 29

新設法人紹介 (財)新田次郎記念会……………21

祭礼歳時記シリーズ⑯ 28 国立劇場ニュース 31

ニューヨークの写真美術環境



菅 十一郎

(九州産業大学助教授)



オフィス、レストランなど、いろんな所に絵、版画、彫刻、ポスター、写真等が室内装飾の一つとして重要な部分を占めているのを十二分に体験いたしました。

アメリカの人達は部屋のムードや自分の好みによって作品を選びます。人間として、より良いもの、立派なものを要求します。そのように美術品、芸術品を部屋の装飾品としなければならぬ環境が、アメリカの芸術界を支えているし、若い芸術家達の発展を助けていると思います。

人々は芸術に理解を示し、芸術教育や美術館などの公共なものにもスポンサーとして多額の財政的援助をしたり、ボランティアとして活躍している姿を多く見かけます。また、子供達はそのような家庭環境の中で自然に芸術感を身につけ、学校教育や美術館などで一層の磨きをかけられているようです。

自分で物を作ったり、描いたりして完成させる喜びを味わい、自分を表現し、心を他の媒体に移入し作品を創作する感激は、人間の欠くべからざる基盤ではないでしょうか。

さて、二十数年、写真に関係してきた私にとって、写真の話をせざるを得ません。写真の誕生以来、人間の歴史を記録してきたものは写

私が文化庁派遣在外研修員として、アメリカへ渡った一九七九年秋はすばらしい光景でした。美しい紅葉の色は一日一日変化し、心持ちよいリズムを奏でていました。パークウェイの両側に立ち並ぶ樹々の中を快走する車内では、七夕の日の彗星のように天をのぼっていく気分になりました。民家のまわりでは、うず高く集められた落葉の山がいたる所に見られ、あまりの多さに、ただただ驚くばかりでした。

このような自然にめぐまれた閑静な所に、私は居を決めました。女流画家の書齋を一部屋借り、居間、台所は共同使用ということで、アメリカでの生活が始まりました。

私の部屋にはベッド、机、ダンス、テレビ、

真であると断定できると思います。一世紀少々の歴史の遺産には、リアリティに克明に描写出来る写真の特長を生かし、数多くのすぐれた、みるべき作品が多くあります。

写真を通して、感情を表現し、人間の心を描いてきたのです。悲しみ、喜び、泣き、笑い、幸福、不幸、時間、空間、宇宙、神秘的な世界とあらゆる世界に挑戦し、ある時は戦場におもむき、ある時は海底奥深く、月に、山に、人間の身体の中へと、写真の世界は大きな拡がりを見せました。

その上、写真は単なる記録にとどまらず、自分を表現する創作物として捉えられてきました。写真に絵画のように芸術性、商品性が付与され、評論家の評価においても芸術としての地位を築いています。そんな訳で、アート全体において、写真の位置が非常に明確になった次第です。

ニューヨーク近代美術館では写真のための常設展示場を持ち、大学等で専門の教育を受けたキュレーターが、展示、講演、さらに写真のコレクションなどの運営、管理を行い、アポイントメントをとりつけた写真家やデザイナーたちが持ちこんだ作品を見たり、購入を決定したりして、歴史的価値ある作品や若い人達の新しい表現を発掘していく仕事もしています。その上、



応接三点セット、四つの電気スタンドに、一つの壁掛け電燈と九枚の油絵が掛っていました。大は五〇号位から小は一〇号位までの風景画で、日本人の私の好みに合うようにと、家主の配慮により、山や松や花が描かれたものでした。私は一日だけ、これらの絵を全部はずした事がありました。理由は白壁だけの広々とした、静かな雰囲気にしたかったからです。残念ながら、この白壁は私に恐怖を覚えてくれました。夜の電燈の明りは部屋を一層狭く感じさせました。翌日、いそいで仕舞い込んだ絵を数点取り出し、私の写真作品と合わせて壁に飾りました。

私がアメリカ滞在中に訪れたどの家庭でも、

予約制によりスタッフの手を通して、作家、研究者、各国研修生、学生などに閲覧室でプリントや資料を手にとって見せています。

国際写真センターは写真だけの美術館で、展示、講演、出版、ワークショップが主な仕事で、ワークショップにはかなり力をいれているようです。初心者よりプロフェッショナルまでに及ぶ多くのコースがあり、若い人から老人にいたるまで、自由に自分の能力と好みに合わせて選択できます。

美術館ばかりでなく、写真はかりを展示したり、販売したりするギャラリーがたくさんありました。これらの美術館やギャラリーでの作品

展示期間は、一般に一ヶ月が標準のようで、大きな展示会は二ヶ月も三ヶ月も展示されます。鑑賞する側にとって、この事は非常に都合がよく、少しぐらいの忙しさでは見逃してしまうことが出来ます。また、ワークショップやシンポジウムなど大学やギャラリーなどの主催で数多く開かれていました。

このように、ニューヨークの写真芸術、写真文化の環境は、日本のそれと比べかなり先に進んでいます。

日本も数年前から、日本写真美術館設立促進委員会ができ、写真の文化遺産を包括的に収集して、保存、展示、閲覧等を行うのを目的とし、活動しています。しかし、まだ建物は出来あがっていませんし、写真専門のキュレーターも少ないようですし(いないかも知れませんか?)、それを育てる教育機関も無いに等しいと思います。

早急に写真のキュレーターを養成し、海外の美術館等に研修生として派遣し、日本全国の美術館に写真のキュレーターを配置し、文化遺産の収集のみならず、新しいすぐれた写真芸術作品をも発掘し、それによって写真だけでなく、芸術全般のよりすばらしい発展を望むものであります。

(すが じゅういちろう)

編集後記

○去る六月十一日、中央教育審議会は「生涯教育について」の答申を行いました。人々が自己の充実や生活の向上のため、自発的意志に基づいて行う生涯教育の必要性は、今日ますます高まっています。このため、答申では、社会の様々な教育機能の整備充実を提言するとともに、社会教育、体育、スポーツ、芸術文化活動について、その生涯教育に果たす役割を評価するともに、これにかかる各種の施設、事業、指導者の充実を強調しています。

○今月の巻頭には、昭和五十四年度文化庁派遣在外研修員として、現代アメリカ写真の創造性等について、ニューヨーク近代美術館等の専門機関で研究された菅十一郎氏に、アメリカにおける写真界の現状などを書いていただきました。また、本年四月設置された国立歴史民俗博物館の概要について、同博物館の中田和夫氏に紹介してもらいました。(〇)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(〇三)二六八二二四二(代表)

「文化庁月報」七月号

(通巻第一五四号)
昭和56年7月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100東京都千代田区根岸7丁目4番12号
営業所 〒100東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (〇三)二六八一二四二(代表)
振替口座 東京 九一六六一番
印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)